

氏名（本籍地）	志村 敦弘（埼玉県）
学位の種類	博士（文学）
報告・学位記番号	第540号（甲（文）第67号）
学位記授与の日付	2024年3月25日
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当
学位論文題目	「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせん」の思想 ——王陽明思想における「公」と「見在」——
論文審査委員	主査 教授 博士（文学） 小路口 聡 副査 教授 博士（中国学） 白井 順 副査 教授 野間 信幸 副査 本学名誉教授 文学博士 吉田 公平

学位論文審査結果報告書〔甲〕

「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせん」の思想 ——王陽明思想における「公」と「見在」——

志村敦弘

【論文審査】

今回、志村敦弘氏から提出された博士論文は、明代を代表する思想家 王陽明（名は守仁、字は伯安。陽明は号。1472～1529）を取り上げ、従来、繰り返し議論の俎上にのぼってきた、その良知心学における「他者」の不在という批判に応えようとするものである。本論文において、志村氏は、原点に復って、原典の再読（吟味・検証）を通して、良知心学は、原理的にも、実践的にも、けっして他者を排除するものではなく、所謂「主観的唯心論」でも、「独我論的独善主義」の思想でもなく、むしろ、孔子を始祖とする儒家本来の「斯の人の徒」と共に生きることを目指す実践哲学の提唱であったことを明らかにする。

本論文の全体の構成は、以下の通りである。

序章—— 問題提起

第一章 王陽明における「天」—— 「廓然大公」なる「吾」——

第二章 王陽明の「楽」—— 「無善無悪」なる「見在」——

第三章 聖人の行いは初めより人情に遠からず —— 王陽明の聖人像——

第四章 王陽明の「易簡」の思想—— 心の「同」と「異」——

第五章 王陽明「万物一体の仁」思想の原点—— その戦場経験と心の「同」——

終章 「無窮盡」に「擴充」する心・良知 —— 「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして誰と
与にせん」の理想に向かって——

参考文献表

王陽明の提唱した良知心学は、性善説にもとづき、是非善悪の価値判断を、専ら「我が心の良知」にのみ委ねる（所謂「性善説の原理主義」）ことから、その判断の妥当性を保証する「他者」の不在のゆえに、独善主義に陥る危険性を孕んでいるという指摘がある。

序章において、志村氏は、この問題に、あらためて正面から向き合い、ならば、陽明にとって、「他者」を他者として規定する「自己」とはいかなる存在なのかという問題について、陽明の所謂「良知」「心」「真吾」の概念、および、「致良知」、「天下の公学」「万物一体の仁」の思想の分析・検討を通して、陽明思想における「他者」の不在という批判＝問題への再考を促す。

第一章では、序章での問題提起を承け、王陽明思想における「自己」の問題、自-他の関係性について、「万物一体」を論じた資料を取り上げて検討する。志村氏は、ここで「感応」の語に注目し、心による感応は、「二者間の作用論理」「出会い」「酬酢」であり、「感応」は、まず「他者（外）からの働きかけ、動かしてある「感」があって、次いで自己の心がそれに「応」じて「一体」となる」という構造であるため、「働きかけの方向としては他者から自己へであって、独善どころか、むしろ他者に対して受動的でさえある」と指摘する。

第二章では、王陽明が語った「楽は心の本体」という言葉の分析を手掛かりに、良知心学における、心・良知の一側面としての人間の感情重視の思想、および、「見在（眼前）」の「人情（人間の実情）」、それに基づく、「生々しい現実」に根ざす思想であったことを明らかにする。

第三章では、王陽明の描いた聖人像について、前章で言及した「見在」概念を掘り下げながら、他者と向き合う現場としての「見在（現在）」の意義・特色について考察する。

第四章では、陽明がしばしば語った「易簡」という語を考察の対象とし、前章までで検討してきた「見在」概念の陽明独自の展開について考察を加える。

第五章は、第一章から第四章までの良知心学の原理的考察を踏まえ、その実践論としての性格を持つ。王陽明が晩年に盛んに主張した「万物一体」論を、その思想の原点（原体験）にまでさかのぼって調査し、考察する。彼の戦場（内乱の鎮圧）や民政の現場における思索や経験を、従来、あまり取り上げられることのなかった、陽明の政治文書（上奏文・公移など）の解読分析を通して、陽明の「万物一体」の思想の根底には、治政の現場での、自身の痛切な経験が存在したことを明らかにする。彼の経験した、生々しい現実（「見在」）を踏まえつつ、最終的に自他・内外の壁を超えた「公」的世界、万物の「同」に根ざす「大同」世界の実現を目指すさまを描き出す。

終章では、第五章まで議論を踏まえつつ、王陽明思想の核心が、孔子の所謂「吾れ斯の人の徒と与にするに非ずして誰と与にせん」（『論語』微子篇）、すなわち、「人と共に生きる」の思想にあることを明らかにする。

以上の考察を通して、陽明が、良知心学の原理論において、心のはたらきを「感応」とするが、その場合、所謂「感応」は、他者（外）からの「感（働きかけ）」を待って、はじめて内なる心の「良知」は起動し、外に「応」ずるという構造上、決して「他者」の存在を抜きに良知心学は成立しえないことを明らかにし、また、実践論として、自身の学を「天下の公学」と自称し、「事上磨練」、すなわち、他者との関係の場としての「事」において、自らの経験を通して「良知」を磨き上げ、鍛え抜くという実践論を説き、事実、陽明自身、同志や門人との講学活動や、内乱鎮圧や民政の現場における政治（経世済民）的实践を通して、「生身の現実」を生きる（＝「見在」する）、かけがえのない他者と向き合うことで、外部に開かれた学（＝生き方）を提唱・実践し、自ら生きていたことを明

らかにする。

以上の考察より、志村氏は、王陽明の良知心学と、それに基づく彼の生き方は、けっして論者の言うように「外部性を消去して、内部性に徹した」「独我論的独善主義」でも、「主観的唯心論」でもなく、むしろ、人と共に生きる、開かれた実践哲学の提唱である、と結論づける。

良知心学における「他者」の不在という問題については、今なお、そこに「理論的な限界」を見たり、論として「不成功」「不成立」を指摘したりする論者もいるが、志村氏は、その問題に対して、所謂「独我論的独善主義」や「主観的唯心論」といったレッテルを貼ることで、軽々に結論を出して思考停止してしまうことなく、王陽明の原典資料の丁寧な読み直しの作業を通して、実直にテキストに向き合い、とことん思索することで、原理的にも、実践的にも、王陽明の良知心学の真の哲学的意義は、人と、さらには、天地万物と共に生きる実践哲学であるという、説得力のある結論を導きだしている。この指摘は、学界への一つの問題提起として、一石を投ずるものとなるであろう。この点を評価したい。また、原典の読解力においても、堅実な思考力においても、それを論文として結実させる表現力においても、今後、一人の自立的研究者として歩んでゆくための、能力を十分に備えた研究者であると認められる。

なお、審査会の席上では、審査員から、朱子学理解において、例えば、「天」「性」「工夫」の理解において、やや不備や誤解があること、また、その「見在」概念の理解、更に言えば、王陽明が提唱し、その高弟の王龍溪によって発展的に継承された「現在」主義の哲学の理解についても、やや不十分な点があるという指摘があったが、いずれも、志村氏の今後の課題であると言えよう。そうした課題に向き合い、それを乗り越えゆくだけの力は、十分に備えているものと判断した。

【審査結果】

以上、論文内容の審査、口述試験の結果をもって、志村敦弘氏の学位論文は、文学研究科中国哲学専攻の博士学位審査基準に照らしても、妥当な研究内容であることが認められた。従って、所定の試験と論文評価に基づき、本審査委員会は、全員一致をもって、志村敦弘氏の博士学位論文は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。